

3

成事在人(成事在人) 人界觀(人界觀)の自生的近代性

Indigenous Modernity of the View of Human Realm as Seongsajaein

目次

- 1
- 2 九天(九天)人身降世と関係変動
- 3 成事在人(成事在人)思想:権威の移動
- 4 心(心)の哲学的意味
- 5 儒仏仙(儒佛仙)思想との比較
- 6 西洋近代性との差異
- 7 天地報恩(天地報恩)と人間倫理
- 8 三界(天・地・人)構造の可変性
- 9 結論および自生的近代性の意義
- 10 参考文献および文献出典

序論:人界観(人界観)とは？

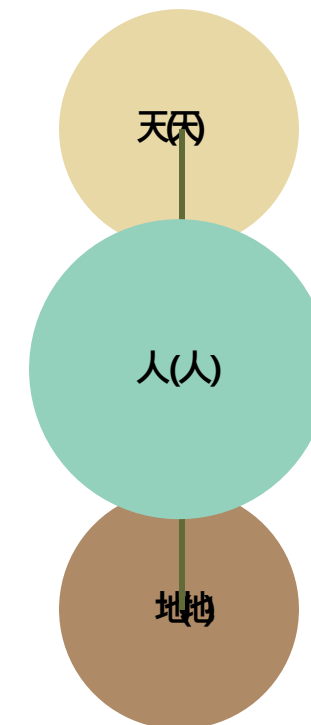
人界観の定義と意味

- 人界観は大巡思想における人間世界に対する観点であり、人間が天地と神明の間で仲介役を担う
- **成事在人(成事在人):**すべての事の成功は人間にかかっているという核心理念
- 九天上帝の人身降世により宇宙秩序が再編成され人間の地位が上昇
- 伝統的天尊地卑人輕から人尊時代へのパラダイム転換

問題意識

- 人間-神明-天地の関係変動がもたらした新たな宇宙論的秩序
- 人間中心世界観が東洋伝統および西洋近代性とどのように差別化されるか？

人界観の三次元的構造



『大巡真理会要覧』抜粋:

「神人調化(神人調化)・解冤相生(解冤相生)・道通真境(道通真境)の三大要諦で治天下(治天下)する。」

九天(九天)人身降世と関係変動

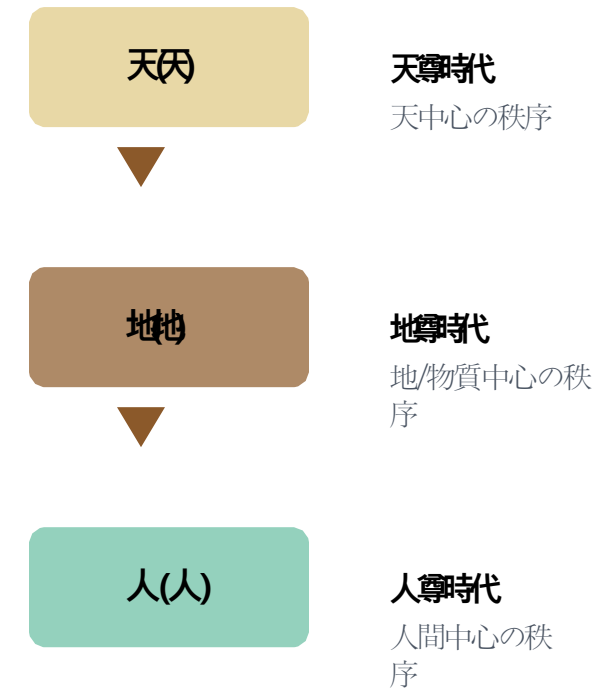
九天の人身降世とは

- 九天(九天)の上帝が人間の身(人身)で下降(降世)して天地公事を行う
- 「九天大元造化主神が人間世界に降臨して三界(天・地・人)を救う九天上帝の大役事」
- 人界と天界の疎通神的權威が人間世界に直接介入

神明-人間-天地の関係の変動

- 伝統的天尊地卑人輕の構図から人間中心へ權力が移動
- 「天地は日月であり日月は即ち一陰一陽である。陰陽が合徳すれば万物化生の道があるようになる。」
- 三界開闢天界、地界、人界の構造的変化を通じた新秩序形成神明
- 神明の位相変化—上帝の人間への権能付与

權威の移動図式



『典經』抜粋:

「天尊と地尊より人尊が大きいので今は人尊時代である。心を勤勉にせよ。」

成事在人(成事在人)思想権威の移動人尊時代

人間中心的世界観の登場

- ◆ 成事在人:「今は神も人間を通さずには天地経営の造化に参与することが難しくなった」
- ◆ 伝統的天尊地卑人輕の構図から人尊時代への決定的転換
- ◆ 「天地の理法を用いるのは人であり、天地の造化を成すのも人である」

権限の移譲過程

- ◆ 人間主体性の確立:天地経営と神道(神道)が人事(人事)の意に合わされる
- ◆ 人間は受動的な存在から宇宙の管理者・経営者へ位相が変化

「天下を主宰するのは天尊でも地尊でもなく人尊である...今から人尊の時代が来た」

- 『典経』

権威の移動の流れ



過去の時代

天が主宰する世界



中間の時代

地が主宰する世界



現在の時代

人間が主宰する世界

人尊時代の意味

人間が天地万物の主宰者として責任と義務を尽くす時代

心(心)と靈台の哲学的意味

大巡思想の心の理解

- 「心は神の存在形態であり、人間の本体であり、天地の中心である」
- 靈台(靈臺):神明が出入りする通路であり人間と神明の交流空間
- 『典経』:「天地の中心が心であり心也は一身(一身)の主宰(主宰)である」

人間の自己変革の可能性

- 心を通じた自己修行と自己完成の可能性
- 『典経』:「心を欺かず一心(一心)で修道すれば天地神明がすべて動く」
- 人間は心の修養を通じて神と人間が一つになる境地(神人一體)に到達可能



東西人間観の比較

東洋哲学	西洋近代哲学
心(心)中心	理性(理性)中心
精神と身体 の 統合	靈魂と肉体の二元論
天人合一(天人合一)	人間と自然の分離
内面修養を通じた変化	理性を通じた外部世界の征服
感性と理性の調和	理性の優位性
神人調化(神人調化)	人間中心主義(人間中心主義)

大巡思想の差別性

人間の内的修養と外的実践の均衡、自

儒仏仙(儒佛仙)思想との統合、再解釈

伝統思想と大巡思想の人間観

- 儒教(儒教):五常(五常)と義理(義理)を通じた人格完成 → 大巡思想では「人間管理権限委任」として再解釈
- 仏教(佛教):寂滅(寂滅)と虚無(虚無)の境地追求 → 大巡思想では「人間主体性強化」へと拡張
- 道教(道教):離調(離調)と自然合一の志向 → 大巡思想では「人間と神明の調和」として再構成

大巡思想の統合的アプローチ

- 『典経』教法3章29節:「儒仏仙(儒佛仙)の道通神(道通神)を受け継ぎ道数を整理し神政(神政)を正して」
- 儒仏仙修行法の内面化(心境(心境)構造を個人修養から「公共善(公共善)」へと拡張
- 伝統思想の限界(超越性、退行性)を能動的な「自生的近代性」で克服

主要概念の比較および統合

概念	儒教	仏教	道教	大巡思想
人間の本質	性善説 (性善説)	無我 (無我)	自然人 (自然人)	神人調化 (神人調化)
修行方法	存養省察 (存養省察)	禪定 (禪定)	養生 (養生)	修道 (修道)
究極目標	聖人 (聖人)	解脱 (解脱)	神仙 (神仙)	道通真境 (道通真境)
人-神明関係	敬畏 (敬畏)	超越 (超越)	疎通 (疏通)	相互作用 (相互作用)
人世救援観	修己治人 (修己治人)	菩薩行 (菩薩行)	濟世 (濟世)	解冤相生 (解冤相生)

大巡思想は儒仏仙の核心的価値を総合しつつ「人尊(人尊)」中心の統合的世界観を構築

西洋近代性批判と大巡の人界観

西洋近代的観点の限界

- 西洋啓蒙主義の人神分離:神の位置が縮小され人間理性が中心に位置
- 西欧的構成主義の限界:人間主体と客体を徹底的に分離する二分法的思考
- 理性中心の合理性追求は精神と物質、主観と客観の分裂を招く

大巡の人界観の独創的観点

- 調理(條理)理致と論理が単純な人間思考の産物ではなく宇宙的原理として作動
- 気は氣は物質と精神の区分なく氣を通じた変化と疎通の原理
- 三界相互關係西欧の人間中心主義と異なり天・地・人の有機的關係の中で人間の位相を定立

西洋近代性と大巡思想の比較

区分	西洋近代性	大巡人界観
神と人間	神の位相の減少、二分法的分離	神人調化(神人調化)
人間の役割 価値の源泉	自然征服、対象化 人間理性、合理性	天地公事の参与、調停者 天地人の相生的理致
認識論的特徴	主体/客体分離	主客合一、身-心の統合
変化の属性	直線的進歩、発展	循環的、相生的変化

「大巡思想は西欧近代性の人間中心主義と本質的に異なる人間自然の有機的關係性と人間神明の調和を通じた新たな人界観を示す。」

天地報恩(天地報恩) 解冤相生の倫理

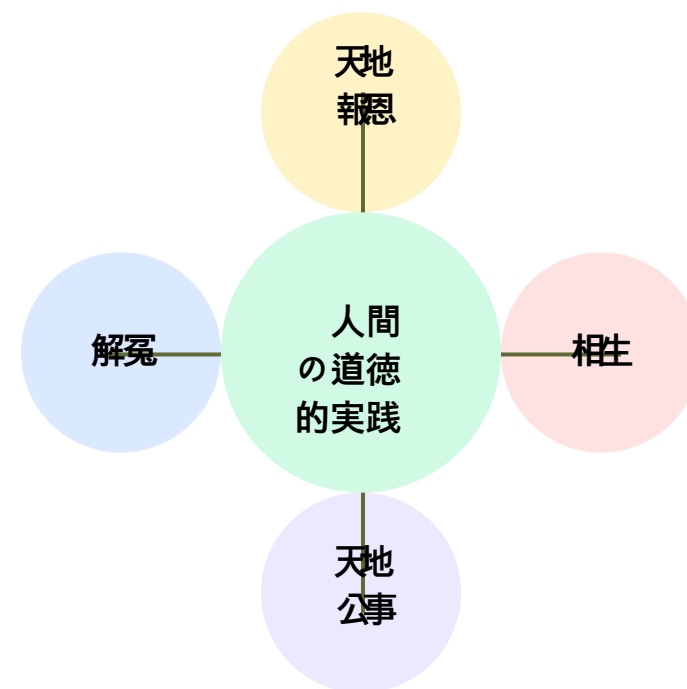
天地報恩と人間の倫理的責任

- 天地報恩天地の恩恵に報いることで、人間が天地を奉じ管理すべき責任意識
- 『典經』教法2章55節:「天地は万物の父母である。故に人事は天地の徳に倣うべきである。」
- 解冤相生(解冤相生)怨恨を解いて互いに生かす相生的倫理体系

人界観と倫理的実践

- 人間が天地公事の参与者として世の開闢に共に参加する実践倫理
- 人間の道德が天地自然の変化をもたらす人尊時代の倫理的責任
- 相生の道德的実践:他人をよくすることが自分をよくする原理

解冤相生の倫理体系



「解冤相生・報恩相生は相生の原理である。すなわち他人をよくする公事は自分もよくすることである。」

- 『大巡真理会要覧』 -

三界(天地人)の可変性、地位上昇、互換性

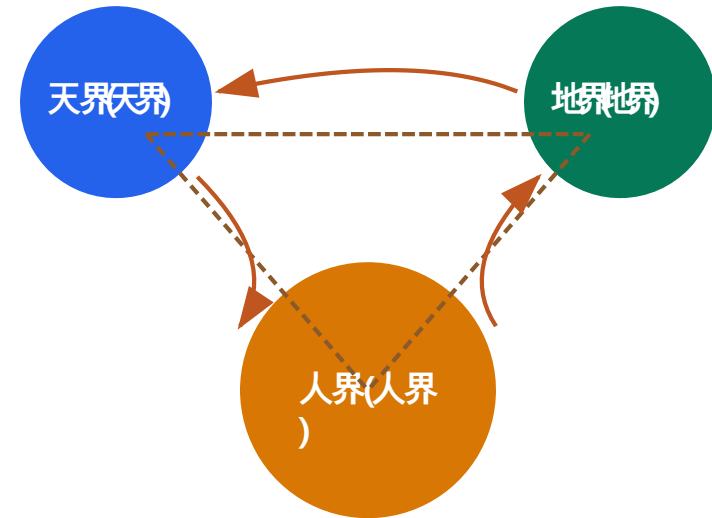
三界構造の特性

- 可変性:既存の固定された位階を脱し天界・地界・人界の流動的關係の形成
- 地位上昇:人間の位階が神明とともに天地變化に主体的に参与する位置へと格上げ
- 相互互換性:人間の修行を通じて神明の地位獲得可能、三界が相互作用する關係へと変化

現代的意味と示唆点

- 既存の東洋伝統の位階秩序を超える新たな人間中心の自生的近代性の確立
- 神人調化(神人調化)を通じた三界の統合的調和と相生の具現
人間の主体性強化と同時に天地との共存を強調 — 生態的意義
- 義

三界相互互換構造図



『典經』抜粹

「天尊と地尊より人尊が大きいのでは今は人尊時代である。弥勒を今後誰もが俦わなければならない。」

-大巡典經 3編 41章-

結論および自生的近代性の意義

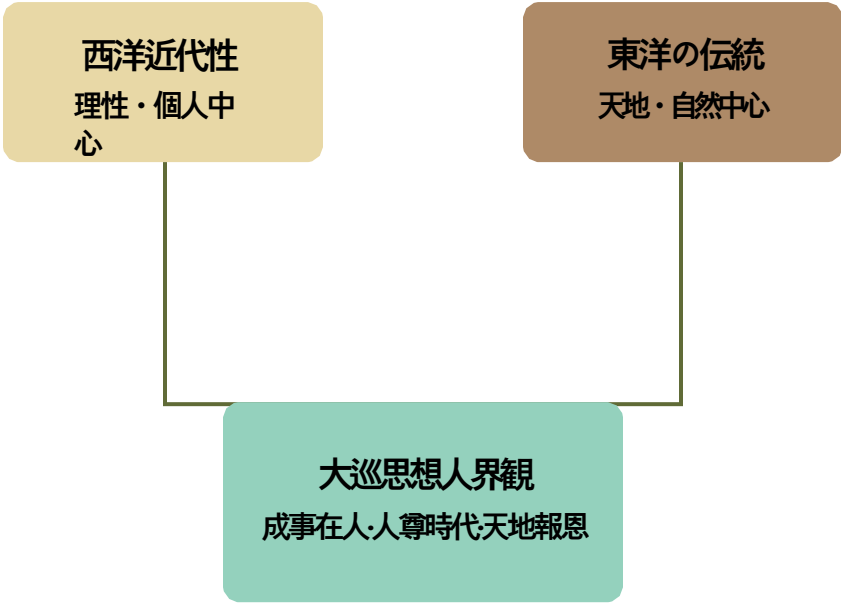
大巡思想の人界観の思想史的意味

- 人間中心性(人中心性)の新たなパラダイム:天地神明を仲介する主体としての人間の位相定立
- 東洋伝統の人間観(天尊地卑人輕)の逆転と再構成:人尊時代の哲学的根拠の提供
- 西洋近代性の分節的な人間-自然の二分法と異なり、統合的で調和ある関係性を確保

自生的近代性の可能性と展望

- 西欧式近代性モデルではなく韓国的脈絡から発生した人間中心的世界観の現代的意味
- 人界観の三界相互互換可能性が提示する未来志向的な人間-神明-自然の共存モデル
- 現代の環境・社会危機克服のための相生・調和・報恩(報恩)の実践的価値

自生的近代性の位置



核心的参考文献

『大巡真理会要覧』、大巡真理会教務部、1969.
『典経』、大巡真理会教務部、1974.
車先根、「大巡真理会の開闢と地上仙境」、『新宗教研究』29、